

第14回 国立市文化芸術推進会議 議事要旨

1. 日 時 令和3年4月13日(火) 18:30～20:00
2. 場 所 国立市役所3階第1・2会議室
3. 出席者 (委 員) 池田委員、高橋委員、宇治委員、福間委員(オンライン)、渡辺委員、久保委員、湯本委員、今村委員(オンライン)、沢辺委員(オンライン)
(欠席委員) 足羽委員
(事 務 局) 雨宮生涯学習・文化・スポーツ担当部長
土方社会教育・文化財担当主査、長谷川社会教育・文化財担当主事
4. 傍 聴 者 0名
5. 議 事 (1) 開 会
(2) 議長及び副議長の選任について
(3) 文化芸術推進基本計画の進捗状況について
(4) コロナ禍での文化芸術活動について(意見交換)
(5) 閉 会
6. 配布資料 資料14-1 文化芸術推進基本計画施策・取組進捗一覧表
資料14-2 文化芸術推進基本計画の令和2年度の進捗状況について【報告】
資料14-3 文化芸術推進会議委員名簿
7. 内 容
(1) 開会
■事務局から、本日の配布資料の確認及び本日の進め方について説明を行った。
■4月1日から新たに委員となった宇治委員より就任あいさつがあった。
■事務局の自己紹介を行った。
(2) 議長及び副議長の選任について
■委員の互選により、池田委員を議長とすることに決定した。
■議長の指名により、足羽委員が副議長に任命された。
■会議の取り扱いについて確認を行った。
(3) 文化芸術推進基本計画の進捗状況について
(4) コロナ禍での文化芸術活動について(意見交換)
■事務局から、資料14-1、14-2に基づき令和2年度の計画の進捗状況等について説明を行った。
■説明後、委員より以下のとおり質疑・意見交換等があった。
【池田議長】
◇資料14-3の名簿に記載された順で、ご意見をいただきたい。足羽委員はまだ来ていないので、高橋委員から近況等あれば。高橋委員は、くにたち文化・スポーツ振興財団の常任理事であり、また、文化活動で幾つか中止等があったと思うが、そういうことも含めてご発言

いただければ。

【高橋委員】

- ◇コロナ禍の中で、2020年度は財団事業としては中止、あるいは延期になったものが多い。施設としても、昨年の4月から6月の半ばぐらいまでは閉館した。その後は開館しているが、利用については定員の50%までしか入れないような状態で、施設運営している。
- ◇資料14-2の1ページの基本理念の1だが、多和田葉子氏のオペラに関して、多和田葉子氏の書き下ろしは既に終わっており、現在、作曲をお願いしている途中で、曲自体は完成していない状態である。演出あるいは振り付けは、多和田葉子氏の書き下ろし状況に従い進んでいるという状況である。また、出演いただくプロの出演者の方も、ほぼ決定をしている。5月23日に「オペラおためしワークショップ」を予定しており、4月8日ぐらいにワークショップに参加いただける方を募集したところ、もう既にいっぱいになってしまっている。今後は、オペラに参加いただく一般の方の公募をし、来年5月のゴールデンウィークに本番を実施したいと考えている。この事業については、このような状況の中で大きな事業が打てないという中から、財団としてもかなり力を入れている事業で、今後、積極的に広報活動していきたいと思っている。
- ◇資料14-2の2ページの下の方の施策②「特色ある文化芸術活動の支援」の「放課後ダイバーシティ・ダンス」だが、これもコロナ禍の影響で、思ったとおりに進んでいない状況である。これは、東京都のアーツカウンシル東京が主催している事業だが、国立市、港区と日の出町の3区市町で実施をしている事業である。もともとの予定は、最後に3区市町が集まって、東京芸術劇場で舞台発表を行う予定だったが、それが延びてしまったことから、舞台発表は行わずに、それぞれの団体で発表を行って映像に残し、それを公表していきたいというふうに進めているところである。
- ◇資料14-2の4ページの下段の基本理念4のところに掲載している「おんかつ」だが、これは、「サクソフォンソノリティ」という名称で、サクソフォンのカルテットをソプラノ、アルト、テナー、バリトンの4つの違った音色のサクソフォンを集めて演奏していただき、音楽に触れ合うというもので、2020年度は五小と七小で実施した。2021年度は、二小と八小で予定している。曲は違うが同じような内容になると思うので、子どもたちに生の音楽に触れていただく予定である。
- ◇コロナの影響で、今紹介した事業以外は中止になっているものが多い。これについて、2021年度中に可能なものは実施していきたいと思っている。なかなかこのような状況で、たくさんの人を集めるという訳にはいかないのが、当財団の理事会の中でも、こういう状況を踏まえた中で、なるべく実行できるものは工夫をして実行して欲しいという状況である。

【池田議長】

- ◇ありがとうございました。それでは、引き続き宇治委員にお願いします。

【宇治委員】

- ◇たましん地域文化財団の運営についても、コロナの影響で、特に人を集めてやるという部分については、できなかった部分が多かったと聞いている。そういった中で、美術館等々については、感染対策をしっかりとやって受入れをしている状況である。団体の受け入れはしてい

ないので、1回に美術館に入れる人数制限というのが20名というような形の人数制限をして、対応しているような状況である。今後、しばらくコロナの状況は続くと思うので、やはりオンラインの活用についても検討していかなければならない。特に人を集めてやることができないので、講義、講話等については、そういった部分も検討していくというようなことで当財団も考えている。

【池田議長】

◇ありがとうございました。それでは、福間委員にお願いします。

【福間委員】

◇私は映画をやっていて、去年の3月に新作を公開したが、4月の第一週に最初の緊急事態宣言が出て、上映していた劇場が休館となった。その後、事態が変わって、映画は上映できるという状態になったり、でも、映画館はよいが、公共施設での上映会はやりにくくなったり、ということがあった。そこで一番感じたのは、最初の緊急事態宣言のときにはみんな慎重になって深刻に受け止めたが、その後は、本当はもっと深刻な状況なのに、割に安易に催し物が行われたりして。うんざりするほど使われた「不要不急」という言葉も、どういうことなのか曖昧になってきた。これはこういうことでやっていくんだ、これはこういうふうにしななければならないんだ、ということについて、説得力をもって行われているかどうか。今もまさにそうだが、緊急事態宣言の解除と状況の深刻さが食い違っているということもある。

◇実際にやれることは僅かでも、こういうときこそきちんと考えて、文化が不要不急ではない、いや、そうは言い切れないという余地を確保して、やはり本当に質の高い文化の提供は怠らないようにしたい。

◇我々も最初に条例をつくることから考えて、いろんなアイデアを出してきたわけだから、ここで、活動としては実際にはできなくても、考えを深めるという次元で、たとえばアーツカウンシルをつくるとか言った部分で、停滞していかないようにすることが大事だと思う。

【池田議長】

◇福間委員、ありがとうございました。引き続き、今村委員にお願いしたい。

【今村委員】

◇私が勤めているのは音楽大学で、一般大学ではほとんど1年間ずっとリモートしか授業がなかったという大学もあったが、音大は、とにかく音を出さないと大学である意味がない。初めは、4月から6月にかけては、やはり学生が動画を自分で撮って送ってきたものに対して、教官がフィードバックをするというような形だったが、そういうふうになると、学生はよりよいものを動画に収めようと思って、ものすごく練習する。だから1回きりではなくて、そうやって自分で自立して学ぶ力、自分でやらなければならないということは、いい面もあったが、やはり再開されて、6月からレッスン科目を再開したが、そうしたら、やはり音楽というのは、そこで空気が振動するから音楽が生まれて、それを共有するコミュニケーションであるということが、本当にみんな身に染みて分かって、やはりこんな幸せなことはないということを再確認した年でもあった。もちろん講義系の科目はすべてオンラインでやっていたが、レッスン、小アンサンブル、あるいは、最後はオーケストラも大ホールを開放して授業を、客席ですごいソーシャルディスタンスを取って、学生たちがオケをやるというような形で、何とか授業を止めないでやっていこうということがあって、音大は非常に授業料が高

いが、そういうレッスンのために結局お金がかかる。なので、保護者の方々に向けても、いち早くそういう活動を再開できたのはよかったと思うが、何しろ外部の人間は大学の中に入れないので、コンサート等は再開したが、聴きに來られるのは全て内部の人間だけ。卒業生とか退職された教員とか、普段は來られる関係者の方は入れないというような状態である。

◇その代わり、必ず全てを動画に収めて、それを随時ホームページ上に順に公開していくという形になっているので、保護者の方あるいは外部の方は、そういう形で見えることはできる。ただし、YouTubeは非常に便利な媒体だが、大抵はネットサーフィンのように過ぎてしまう、それをじっくり見るというのはなかなかできない。最初の2分、3分で、すぐに次に移ってしまうということがあって、やはり物事の深い理解とか深く感じ取るとか、そういう芸術の交感にはなかなか至らないというふうに感じている。

◇新型コロナウイルスは今も変異株が増えてきているが、大学は定員の80%ぐらいまでを上限として、ソーシャルディスタンスを取って、科目を選んで、とにかくリモートと対面を併用しているという状況である。私は家も近しい車通勤なので、あまりリスクがないということで、ほとんど対面授業を行っている。

◇コンサートは、外の大きなホールか、有名なホールで行われているコンサート等は、いち早く感染対策というのは万全にして、少ない人数で再開しているというのが、ほぼ全体の音楽界の現状である。ストリーミング配信などを行っているが、期間限定配信もあって、あるいは、コンサートが行われているときだけリアルタイムで配信する、そういうチケットを出しているところもある。それで、まだもう少しいろいろなやり方が出てきて、試みている状況で、今年2年目なので、あと1年ぐらいすると、大体いろいろな対応もうまく回っていくのではないかなと思う。

◇大学に勤めていると、やはり都心のコンサートに絶対に間に合わない、行けないということがあるので、かえってそういうものが身近に、ちょっとチケットをネットで買って、リモートワーク、オンライン授業が終わった後に学校で視聴したりということもできるので、バランスの問題で取捨選択をしながら、やっぱり時代の流れに応じて、音楽界というのも変わっていくというような様子ではないかなと思う。

◇感染対策については、各ホールは全てホームページ等で全部公開されているので、例えば私は関係者として楽屋口から入るが、コンサートが始まったら全部閉めて表からしか入れませんとか、一方通行の道を作って人があまりすれ違わないようにとか、あるいは何メートル以内にはお客さんは入れない体制とか、そういうことは全て行われている。それはもう社会的にどこでも行われている。

◇春休みになって少し時間ができたので、芸小ホールで行われた「くにたちデビューコンサート」のストラヴィンスキーの演目に出たが、50%までだったが、とにかくチケットも本当に売れていて満席だった。やはりみんなすごくそういう生のものに飢えている。何かイベントがあれば、行きたいと思っている。そういう、積極的に自分がそういうものを受け取りたいという強い欲求がある方は、やっぱりかなり数多くいるのだなと思っている。

◇反面、やはり文化芸術活動になると、積極的に自分からは出掛けられないが、先ほどの「おんかつ」のように、あまり馴染みのない方に向けていろいろな活動を展開するとか、そうい

うことには、受け取る側も、感染に対するいろいろな温度差があるので、届ける側としてもそのあたりをすごく慎重に考えて、せっかく文化芸術というものが本当に心の栄養のものなのに、感染ということで何か、誰か一人でも不安なことが起こることがないように、いろいろ進めていきたいと思っている。

◇旧国立駅舎のピアノは気をつけて聴いている。よく弾いている方がいて、かなりピアノが使われている様子である。私自身は旧国立駅舎に入って聴くということはないが、音が漏れ聞こえてくる様子、そういうのでも、駅を降りて、ああ、国立は音楽があるまちだなというふうに、自由に演奏ができるまちだなというふうに思えるというのは大変素晴らしいことだと思うので、今後収まってきたら、ぜひイベントができればと考えている。

【池田議長】

◇今村委員、ありがとうございました。最後の国立らしいというか、駅舎のピアノのこともありがとうございます。それでは、渡辺委員にお願いします。

【渡辺委員】

◇委員紹介の欄に、平成28年度くにたち市民文化祭実行委員長とあるが、私は第61回市民文化祭の実行委員長で、現在はもう65回と、その後4年続いている。64回までは本当に今までどおり参加団体も20から30近くあり、盛大に行われていたが、昨年、令和2年のときは、このコロナ禍のことで、各団体において、中止かこのままやるかという感じもあったが、頑張っようよという団体が8団体あり、無事に65回の市民文化祭を行った。

◇私が参加している団体の一つ芸能フェスティバルは芸小ホールを使うが、日舞は高齢者が多いことから、残念ながら日本舞踊連盟は辞退した。ところが、若い方の多いグループは参加するというので、本当に細々ではあるが、この芸能フェスティバルを含む文化祭が途切れることなく令和3年度につながって、再来週会議がある。やるか、やらないか、どういう形にするかというようなことで、話し合いが持たれると思う。いつもだと、どのように集客しようかということを考えているのだが、令和2年度は、あまり大勢来られないほうが密にならないと、本当に変な希望で進めてきたが、今回参加したどのグループも問題なく、やってよかったというようなことだった。

◇国立市に長いこと住んでいて、このような事態というのは初めてである。私たち市民のレベルでやる文化活動は、舞台関係ばかりでなく、茶道、華道、国際交流と、いろんな団体が模索しながら細々と活動を続けているというのが現状である。

◇文化芸術推進会議委員をさせていただき、あらゆる分野の国立市での文化活動というものも、おかげ様で理解できた。本田家も、通るたびに気にかかって見るようになって、また、国立駅舎と周辺の開発が、どういう風になっていくのかなという期待もあり、これからもこの会議に出席し、国立市の文化芸能活動に参加したいと思っている。

【池田議長】

◇渡辺委員ありがとうございました。それでは、久保委員にお願いします。

【久保委員】

◇令和2年度から、学校ではコロナ禍で、学年単位、全校単位で集まることや、リコーダーなど様々な制約がある中で教育活動をすすめてきた。保護者の方も学校にも来られないため、学校はどうなっているのだろう、学校の様子を知りたい、という声も多くあった。改めて「見

えないこと」への不安があるのだと思った。見える形で安心を与えること、芸術の役割を改めて身染みて感じた次第である。

◇学校が再開されてからは、子どもたちが主役となり、創意工夫を生かして学校をつくっていく取り組みを進めた。国立第二小学校では、展覧会を予定どおり開催した。多くの保護者の方に来場いただき、作品展示とともに、子どもたちが活動する様子をスライドショーで披露した。ご覧になった保護者の方から好評をいただいた。子供の姿に涙をうかべる方もいらっしやった。

◇コロナ禍で子どもたちは、自分たちには何ができるかというのを、主体的に提案するという形で学校をつくっていった。その中で、昨年度の卒業生たちは、学校に自分たちの「形」を残したいという提案をしてくれた。ちょうどそのころ、市の国立駅周辺整備課の方から、旧国立駅舎の大正15年創建当時の古材の活用を提案いただいた。国立第二小学校新校舎建設が始まるときの意義を重ね、旧国立駅舎の古材をいただき、6年生58名で学校の名前を彫り込んで、新校舎に設置する看板を制作した。子どもたちは、自分たちが、まちの新しいシンボルを作ったという達成感、充実感をもって卒業していった。看板は今、二小に常設展示しており、新校舎が建設された後、設置する予定となっている。

◇旧国立駅舎を使って、第二中学校が生徒の作品展示を行った。大変好評であったと伺っている。昨年度の会議で話題になったが、やはり展示をするには少し不便だったようだ。展示のしやすいパネルやワイヤー、フックなどの設備がそろえば、より文化の拠点としての旧国立駅舎として利便性が増すのではないか。

【池田議長】

◇久保委員、ありがとうございます。それでは、引き続き沢辺委員にお願いします。

【沢辺委員】

◇私も複数の活動をしているが、特に文化芸術イベントのオーガナイズとかプロジェクトマネジメントの仕事は、今年に至っては、非常に実現が難しくなり、場を使った活動というのがかなり縮小したり、もともとお話しさせていただいていた芸術家の方だったり劇団の方々には、ちょっと難しくなったよねということをお話しさせていただいたりしていて、非常に心苦しい1年だった。私自身も非常勤で幾つかの大学で教えているが、全てオンラインでの授業になり、ほぼ今年は自宅にいることが多い1年になってしまった。

◇国立市との関係だと、私は「日伊櫻の会」という、国立の桜をイタリアに植樹する一般社団法人の代表理事をしているが、大体毎年、当会ではイタリアに行って、文化芸術交流であったり、向こうの当会でお世話になっている方々との親交を深めるような活動をしていたが、今年に至っては、当然、イタリアは日本よりはるかに非常に厳しいコロナの状況によって、渡航は全然かなわなかった。

◇ただ、非常に、やはりコロナでマイナスな面がもちろん多かったと思うが、逆に、オンラインツールが非常に普及したおかげで、海外とのコンタクトというところにおいては、とても進展があったのではないかと思っている。今までは、イタリアで何か起きて、オンラインツールなどの普及というのは全然されていなかったと思うが、こういったコロナのおかげで、イタリアとコンタクトさせていただいているアーティストだったり、出版社とか、そういったところがどこもオンラインツールを導入するようになってきた。そういった関係で、これ

まで直接向こうに行ってインタビューしたり、コミュニケーションを取らないと進まなかったプロジェクトというのも、逆にオンラインでインタビューしたり、来年度のプロジェクトとか、そういったことについて会議をしたりという場合にやりやすくなったというところに関しては、コロナ禍の中で、私たちが体得したデジタルツールというものがより身近になったというところに関しては、海外との交流であったり、離れた地域との交流という意味では、進展があった部分もあるのではないかと思う。

◇今、実際に来年に関して、イタリアのとある劇団とコンタクトを取っており、実際に来られるかどうかというのも今、非常にグレーゾーンで、来られた場合はもちろん来ていただきたいと思っているが、来られなかった場合はどうするかという話をしたりして、そのときに、オンラインとかツールを使いながらワークショップができないかとか、オンラインツールをしながら日本の子どもたちとコミュニケーションを取れないかとか、そういった模索もしている。コロナが終わっても、こういったコロナの時代の中で蓄積されているそのノウハウというか、海外と日本とが連携し合いながら、ワークショップとかプロジェクトを計画していくというノウハウは、恐らくコロナ後も蓄積されていくという意味では、ポジティブな部分もあるのではないかなと思っている。

◇一方で、やはり芸術文化というのは生の体験というものが非常に大事だと思うので、デジタルツールとかそういうものに走りがちになってしまうところもあると思うが、あくまでもそういったツールを活用しながら、生の体験とか1回きりの経験というのが非常に重要であるということ、私自身も大切にしながら、デジタルの重要性ということも考えていくべきだなということを感じている。

【池田議長】

◇ありがとうございました、沢辺委員。それでは、引き続き湯本委員にお願いしたい。

【湯本委員】

◇私はアンサンブルをやっており、3月に芸小ホールのレストランコンサートに出演した。今年はコロナということで人数制限が厳しかったので、随分早くから入場券のために並んでいて、大勢の方で満席になったが、やはり直接音楽を聴きたいと言われる方が本当に多かったようだ。

◇資料14-2の3ページの職員向けのアートマネジメントセミナー、これはよく実施いただいたなと思って、とても大事なことだと思っている。昔も「行政の文化化」というものが叫ばれた時期があって、そのうちどこかに立ち消えになってしまったのだが、行政の職員がそういう意識を持って行政を進めるということはとても大事で、これはぜひ2回、3回、実施する形で進めていただきたい。さらに、これは私の個人的な意見だが、1年に一遍でも2年に一遍でもよいが、各セクションにこちらの担当課がヒアリングをして、例えば今年度の事業は文化芸術にどういうふうに関心を砕いて仕事を考えたかというような質問をするだけで、意識が変わってくるし、真剣にもなるし、またそれが続いていくということになるのではないかと期待している。

◇今回の報告は、ほとんどが行政、あるいは行政の外郭団体、そういう人たちの活動の報告だったが、やはり市民が主体という意味では、もっと市民の方々の動向に関する報告がないといけないのではないかと思う。これは、事務局の手の問題とかいろいろあるし、また、そう

いう団体の掌握というものもまだできていないのだと思うが、やはり市民がどう動いたか、このコロナでどういう影響を受けているのかということ、そういった報告もないと、今回の私たちが作ったこの条例も具体的にならないし、ぜひそういった方向に進んでいただきたいと思う。

◇資料14-2の一番最後の推進体制、アーツカウンシルについて、これがどのようなスケジュールで進むのか分からないが、これはぜひ早めに進めていただきたい。

【池田議長】

◇ありがとうございます、湯本委員。それで、これで一応皆さんの御意見をお伺いしたので、最後に私から。

◇本日、この会場に来るのに大学通りを歩いてきた。その中で感じたのは、くにたち文化・スポーツ振興財団がかつて行った「くにたちアートビエンナーレ」は、今、一旦中止しているが、全国からアーティストに彫刻作品を応募していただいて選定した作品だが、このコロナ禍の中でも確然とそこに位置している。今日も新緑が非常にきれいだったということもあるが、今までの人を集めるというものより、古典的な方法かもしれないが、固定したものがそこにあるということ、変わらないであるというものに、社会の変動と、もう一つそこにあるというのが、やはり国立の文化の一面だと思う。

◇私個人のことを少し報告すると、2019年に東京で開催した展覧会を、2年間かけて北海道の市立小樽美術館で開催予定だった。それは、何館かの美術館から作品を借りてきて、それでやる。これはもう完全に駄目、中止になった。そして、1年たったらやりましょうという学芸員、館長の話だったが、それも、やはり大型トラックを持ってきて、幾つもの美術館から集めて持っていくということはできなくなった。できたのはカタログだけ。そういうのがコロナで非常に大きなことである。

◇それからオセログेमのように連動して、今年度に入り、札幌にある北海道道立近代美術館で2月27日から4月4日まで、池田良二展が行われた。これは、私がいるところから列車で7時間かかるため、その日帰るような予定で行ったのだが、たまたま新聞社の人とのインタビューをする機会があったので、その中で話していたのは、大体入場者が6割ほど少なくなっているが作品に対しての、個人と作品との間隔は非常にはっきりしている、と。新聞社の動向によって、宣伝によって、今まで美術館というものが多くの動員数を持ったのに比べると、見る側が自分の判断で見に来るという状況に変わったということを書いていた。

◇それから、今、3月23日から5月16日まで、東京の北の丸にある東京国立近代美術館で収蔵展をやっている。北海道立美術館が持っている23点が出たが、今度、東京国立近代美術館では今2点、6月まで3階で、MOMATコレクションという形で出ている。

◇それから、4月17日から6月20日まで、これも収蔵展だが、イギリスのアーティストのライアン・ガンダー、私はお会いしたことはないが、その人が東京オペラシティの収蔵品の中から作品を選んでの展覧会が行われるという、今までにまるっきりないような展覧会。そして、北海道の場合は、私が伺ったのは3月中頃だったので、1日だけだが、今までだと学芸員というか、キュレーターの方としゃべって、よければ夜も懇談ということがあったが、そういうコミュニケーションは一切ない。3月なので、北海道は5館美術館があるので、移動があるので、もう引っ越しのほう忙しいとか、そういうことで、会食はなかったが、

そして、収蔵展なので、もう学芸員が自分の意思でやればよいという考えなので、作家とはもうひとつ切れ離れたともいうか。

◇国立市の場合も、応募した作家は、それに対して発言はしないが、確然とそこに意思があって、大学通りを歩く方々が、興味のある人はそこで立ち止まるという、そういう1つの前衛的、今のように、選挙のように人を集めなければ、何かこれだけ人数が入らなければいい結果にならないという答えではなく、平然と、地味であるがそうしたような形というのは、今回、こういう企画の中でも試される機会ではないかなという、私の関わった展覧会の中でそういうふう感じた。

【福間委員】

◇アーツカウンシルは、どうなっているのかが気になった。

【高橋委員】

◇アーツカウンシルだが、市と財団と一体で進めていく予定になっているが、正直、具体的なところまではまだ進んでいない状況である。今後、コロナの状況も見極めながら検討していきたい。

■事務局から、今後の流れについて説明を行った。

【事務局】

◇今後の推進会議だが、本日のような形で年に1回開催したい。事務局から進捗状況を御報告させていただき、皆様には点検・評価等をお願いしたい。